St. Luke's International University Repository

Educational programs of international health and nursing in United Kingdom and Japan:A survery report.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田代, 順子, 酒井, 昌子, 佐居, 由美, 堀内, 成子, 鈴木, 良美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/479

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

報　告

英国と日本における国際保健・看護関連教育プログラム：調査報告

田代　順子[1)]　酒井　昌子[2)]　佐居　由美[3)]
堀内　成子[4)]　鈴木　良美[5)]

Educational Programs of International Health and Nursing in United Kingdom and Japan：A Survey Report

Junko TASHIRO, RN, Ph.D[1)]　Masako SAKAI, RN, MS[2)]　Yumi SAKYO, RN, MS[3)]
Shigeko HORIUCHI, RN, DNS c [4)]　Yoshimi SUZUKI, RN, MS[5)]

〔Abstract〕

This survey was a portion of the lager study for development of educational programs enabling Japanese nurses to fully participate in international cooperation for international development. International cooperation for global development is in demanded from Japan as a developed country. The authors visited and conducted interviews with two educational programs: "Tropical Nursing" at London School Health and Tropical Medicine, University of London and "International Health" at Department of Nursing, Midwifery and Community Health designed for graduate nurses at Glasgow Caledonian University. The authors collected information about: history and philosophy of educational program, degree or qualification after completion, targeted students, goals of course, students' background, jobs of graduates. In addition, the authors collected the same information on an international health program Japanese nurses attending and entitled "Health System Manageme nt" provided by National Institute of Public Health in Japan. "Tropical Nursing" is designed by using knowledge base and skills of tropical medicine and public health. "International Health" fro m an experienced nurse is designed to provide global perspectives for graduate nursing and health sciences students. In Japan, "Health System Management" provides both Japanese health professions as well as trainees from developing countries rich contents and learning environment. However, the number of nurses able to attend is limited. Currently, a number of nurses is working for development of nursing in developing host countries, and demands for appropriate competencies for international cooperation is great. The authors identify that new international program designed for Japanese nurses should be developed in the near future in order to responding to their continuing learning needs.

〔Key words〕 International Health,　International Contribution,
〔キーワーズ〕 国際保健,　国際貢献,
International Medical Cooperation, Nursing, Graduate (Master) Educational Program
国際医療協力,　看護職,　大学院修士課程

1）聖路加看護大学　地域看護学　St. Luke's College of Nursing, Community Health Nursing
2）聖路加看護大学　地域看護学　St. Luke's College of Nursing, Community Health Nursing
3）聖路加看護大学　基礎看護学　St. Luke's College of Nursing, Fundamentals of Nursing
4）聖路加看護大学　母性看護・助産学　St. Luke's College of Nursing, Maternal Infant Nursing& Midwifery
5）聖路加看護大学大学院看護学専攻科博士課程　St. Luke's College of Nursing Doctoral Course Community Health Nursing

2004年11月29日　受理

〔抄　録〕

本調査の目的は，現在日本が国際社会で求められている国際貢献できる看護職を育成する教育プログラムの開発の一環として，国際協力先進国の英国と日本の国際保健関連プログラムを調査し，今後の日本における大学院修士レベルの教育プログラムの方向性を明らかにすることである。本年度，英国・ロンドン大学衛生熱帯医学大学院（London School of Hygiene & Tropical Medicine）の熱帯看護ディプロマ（Diploma in Tropical Nursing）コース，グラスゴー・カレドニアン大学（Glasgow Caledonian University）での看護助産地域保健学部の「国際保健」を，科目設立の経緯，修了後の学位・資格，対象学生，プログラムの目的，内容，研修生の背景，卒業後の進路などの点について調査した。加えて，日本の看護職が受講する日本で行われている国立保健医療科学院の公衆衛生行政管理（Health System Management）コースに関して情報収集した。英国の一つは公衆衛生熱帯医学を基盤とした看護職のためのコースで，将来開発途上国での実践に備える人材となりうる人々が学んでおり，他の一つは，修士課程の学生に対して看護職が中心となって提供する「国際保健」のコースで，他の保健関連分野の学生とともに看護学の修士レベルの院生が学ぶものであった。日本の「公衆衛生行政管理」コースでは，国内外の国際開発に関わる人材とともに学習できる恵まれた環境であるが，その中で学ぶ看護職の数は限られていた。国際協力で働いている看護職が求めている各看護専門領域における国際協力のコースは，現在，提供されているコースに加えて，さらに国際看護職が必要とする能力育成ニーズに応えられるコース開発の必要性が示唆された。

Ⅰ．はじめに

わが国の国際貢献は国際的地位が向上するに従って国際的責務として世界から求められている[1]。2003年度の国際保健機関に対する日本の分担金は8,000万ドルでほぼ全体の20%を占め，世界第2位の額を分担している。加えて，1996年6月の先進国首脳会議で日本は「世界福祉構想」を提唱し，積極的に国際開発のためのさまざまな取り組みを進めている[1]。しかしながら，国際貢献できる人材の育成に関して十分に体制の整備ができているとはいえない現状である。森[2]によると，わが国の看護教育において，国際看護学あるいは国際保健学を1つの科目として教授している看護系大学は45.1%あり，増加の傾向にあるが，大学院で国際看護学の科目を開設しているところは数校という現状を述べている。著者らの所属する聖路加看護大学においては，学部1年生の看護学概論で1コマ「国際看護」が，2年生の地域看護論Ⅰで1コマ「海外で活動する地域看護職の働き」が，そして4年生の国際看護ゼミナールが選択科目として開講している。しかし，いまだ修士課程での教育は始まっていない。

著者らは2002－2004年度の3年間，国際医療協力研究委託費の助成を受けて，「開発途上国における看護技術移転教育プログラムの開発に関する研究－国際看護専門看護師育成教育プログラムの開発」に取り組んだ。2003年度までに開発途上国で1年以上国際協力活動をした看護職から協力活動，活動で必要とされる能力，そして継続学習ニーズを明らかにし，修士レベルのカリキュラム案を構築した[3]。本年度，このカリキュラムを洗練させるために，国際協力先進国である英国の国際保健・看護教育を調査した。加えて，日本の看護職が受講する日本で行われている国際開発に関わる人材育成コースの代表として国立保健医療科学院が日本国内外からの研修生に対して行っている公衆衛生行政管理（Health System Management）に関して情報収集した。

本稿では，まず，英国の国際保健・看護のコースの背景として今日の英国の看護教育状況，および2004年10月に調査した英国の国際看護関連の2校の国際保健・看護の教育カリキュラム，そして，日本で行っている国立保健医療科学院の国際開発のリーダーとなる人材育成コース「公衆衛生行政管理」について調査した項目（科目設立の経緯，修了後の学位・資格，対象学生，プログラムの目的，内容，研修生の背景，卒業後の進路）の概要一覧（**表1**）を参照しながら報告し，最後に，今後の大学院修士課程の国際看護コースの開発についての展望を述べる。

Ⅱ．英国看護教育の概要

英国看護教育の改革は，1986年に始まり，それまでは看護教育は病院を基盤とした看護学校における教育が主流であった[4)5)6)]が，その年にプロジェクト2000委員会が策定した看護制度の改革案によって，看護教育施設は一斉に大学へ昇格あるいは統合され，准看護師養成も停止された。さらに，1999年には，同プロジェクトの評価を踏まえ，看護教育をより実践に適したもの「Fitness for Practice」にするために，英国の看護教育制度や看護師資格登録などを管理する機関であるUKCC（英国看護助産訪問中央協議会，United Kingdom Central Council）から報告書[7]が提出された。このUKCCは

2002年にはNMC（看護助産協議会，Nursing and Midwifery Council）に改編されている。

英国における看護教育の基本的考え方は，国民保健医療制度（NHS, National Health Service）のもとで働くための準備過程であり[8]，上記の看護教育改革での看護教育の大学化も，国の政策に沿って行われている。

英国の大学における看護教育には学部さらに大学院として修士課程，博士課程の教育がある。学部にはさらに2段階の課程がある。第1段階として，看護師資格取得を目指す3年間の課程がある。この課程を修了すると準学士に相当するディプロマ（Diploma）を取得できる。第2段階として，看護師資格取得後に，より専門的な知識・技術の獲得と学士（Degree）の取得を目指す課程がある。これら2課程は，実習50%，講義50%の割合で構成されている。英国は自治体によって教育制度が若干異なり，看護教育に関しては，NMCと各自治体の指針のもとにカリキュラムが作成される。今日，英国の看護師不足が課題であり，その対策として大規模な看護師養成が行われている。さらに，多くの学生に門戸を開くため，講義はフルタイム，パートタイム，あるいはe-learningなどを通じて行われ，社会人の学生も多い。

Ⅲ．英国における国際保健・看護教育モジュール

英国における看護教育において，国際保健・看護のコースあるいは科目は，看護教育の主要科目として位置づけられているわけではない。しかしながら，英国は長い植民地の宗主国としての歴史を持ち，その歴史的背景のもと国際保健や国際協力の歴史を有している。英国における国際看護コースは卒後教育レベルのコースとして，2校において短期コースが開設されている。1校は，ロンドン大学衛生熱帯医学大学院（London School of Hygiene & Tropical Medicine）の熱帯看護ディプロマ（Diploma in Tropical Nursing）コースで，他の1校はリバプール大学熱帯医学大学院（Liverpool School of Tropical Medicine）の看護職を対象とした熱帯医学（Tropical Medicine for Nurses）コース（3週間の集中的なコース）である。さらに，グラスゴー・カレドニアン大学（Glasgow Caledonian University）においては，国際協力の経験豊富なパーフィット（Perfitt）看護助産地域保健学部長（Dean of Nursing, Midwifery & Community Health）が科目のリーダーとなり，修士課程の選択科目として，「国際保健（International Health）」を開講している。

以下，ロンドン大学衛生熱帯医学で提供する熱帯看護学とグラスゴー・カレドニアン大学の国際保健のコースについて説明する。

1．ロンドン大学衛生熱帯医学大学院熱帯看護ディプロマコース

熱帯看護コースのオーガナイザーであるClaire Bertschinger講師（看護師）にコースの概要を聞く機会を得た。本コース（**表1参照**）は，看護師や助産師が発展途上国で看護実践するための基礎知識を身につけるための認定コース（定員70名）である。このコースは，1週間に1日，9週間にわたる講義（または演習）がプログラムされる。

コースの特徴として，母体に公衆衛生と熱帯医学を持つ強みを発揮し，講義・演習は熱帯病を含む幅広い専門分野の講師陣により教授される。また，その焦点は発展途上国で看護を実践するための知識が幅広く学べることである。さらに，このコースで学んだ日本のナースは面接で，「自分の身を熱帯病から守る」ことはできるようになったと話した。科目は，Anemia（貧血）and Sickle cell disease（鎌状赤血球）;, Immunology（免疫学），Intestinal infection（消化器系感染症），Medical anthropology（医療人類学），Epidemiology（疫学），Nutrition（栄養学），Parasitology（寄生虫学），Refugees（難民），Tropical skin conditions（熱帯地方における皮膚病），War wounds（戦争時外傷），Water & sanitation（水と衛生）などで構成されている。特徴として，理論だけでなくマラリア原虫を見極めるために顕微鏡を使った演習が含まれていることがあげられる。

また，このコースは，週に1日の開講であるので，社会人の履修が容易であり，将来発展途上国で働く希望のある看護職のために広く開かれている。コース修了後に，広く浅く学んだ知識を深めるため，修士課程に進学する学生もおり，発展途上国における国際看護実践のための入門には最適なコースであるとのことである。しかし，Claire Bertschinger氏は専門家として，プロジェクトを企画運営しリーダーシップをとるためには，修士または博士レベルの専門的な知識・技術が必要であると話す。しかし，このコースは看護師がとっているコースであるにもかかわらず，連合王国王立看護協会（Royal College of Nursing）には認定されていないとのことであった。

2．グラスゴー・カレドニアン大学看護，助産，地域保健学部修士課程における「国際保健」

グラスゴー・カレドニアン大学の看護，助産，地域保健学部は，英国の看護教育における継続高等教育法に基づいた専門学校から大学への再統合化によって設立された。国際看護に関する科目（**表1参照**）は，「国際保健（International Health）」として，修士課程の選択科目に位置づけられており，修士レベルの上級実践者の基本的能力として，国際的視点を養うことを目的としている。

表1　国際看護に関する教育プログラムを開講している大学・機関の教育プログラムの特徴

調査大学と課目名	ロンドン大学 公衆衛生学・熱帯医学学部（英国） Diploma in tropical nursing course	グラスゴー・カレドニアン大学 看護学部修士課程（スコットランド） International Health	国立保健医療科学院（日本） 公衆衛生管理行政セミナー
課目設立の経緯	伝統的に公衆衛生学・熱帯医学の実績を持つ学部であり，継続高等教育法に伴う再統合化（職業教育の専門学校から大学へのシフトアップ=ポリテックという）の流れを受け，登録看護師のための継続教育として設立された	継続高等教育法に伴い1992年に専門学校から大学への再統合化（職業教育の専門学校から大学へのシフトアップ=ポリテックという）によって看護学部が設立された	1998年に実施された公衆衛生人材育成セミナーから発展した。厚生科学省，国立保健医療科学院，独立行政法人国際協力機構の協賛で行われている
修了後の学位・資格	Diploma	看護学修士	な　し
対象学生	発展途上国で活動の経験のある，または希望する看護師・助産師	修士課程にある学生	1．日本で研修を受けている発展途上国のカウンターパート 2．国際保健専攻の日本人修士生
プログラムの目的	熱帯または近似環境で活動する看護師のための準備のためのもの。 具体的には，多くの主要な熱帯疾患の原因，診断，予防や治療，または熱帯や近似環境での活動に関する文化的構造や組織的側面の知識や理解を深める	・個人やコミュニテイの健康について政治文化的，疫学的，社会的要因の重要性を理解し評価する ・国際ヘルスケアシステムの相違や人口保健動態の評価を理解する ・ヘルスケア開発における先進国（西洋）医療を批判的に評価しつつ，一定の国民の健康を促進する方略を明らかにするために，一定の国のヘルスケアシステムを分析する ・ホスト国の文化，疫学，社会，政治的要因の重要性を踏まえた国際専門家実践モデルを理解し利用する ・国際的な活動やコンサルトの準備に際し，ある一定の国の特定な健康課題の分析のためのスキル開発 ・国際文化または国際ヘルスケア活動の準備に関して適切な文化的アセスメントの実践を可能にする	セミナーの目的は，公衆衛生専門官のための行政と管理能力の向上を図るとしている。 〈目的〉 ・日本のヘルスシステムにおける行政管理プローチを学び，研修生の自国に適したあり方を明らかにする ・研修生の国に適応可能な効率的，効果的ヘルスサービス，保健管理行政のあり方における中心的概念やプロセスを学ぶ ・ヘルスサービス計画，管理を促進するための様々なリーダーシップモデルやアプローチ（個や集団への），リーダーに求められる質を学ぶ ・アクションプランの概念枠に基づく行政管理アプローチを組み入れたアクションプラン開発能力を学ぶ
プログラムの内容	定員70名。コースは，19週（週1日の講義） ・熱帯における活動の中で，看護職自身の身を守るための知識を強化するために，熱帯疾患のラボ演習を重視 ・熱帯における疾病の動向，診断，予防はもちろん，さらに，熱帯である発展途上国の文化理解のために人類学，疫学，さらに保健活動の基盤であるPHCなど熱帯での看護活動の上で必須な科目を幅広く展開 ・最終的には，国際看護に関する課題に対してエッセイを提出。この課題を通して文献検索や批判的思考を育成 ・講師陣は，非常勤講師や公衆衛生学部の兼任によって講義が行われる。通常は，コースのコーデイネーター兼講師の者が1人のみ ・週1日の講義のため学生がスムーズに学習が進められるよう学習ガイドが充実している ・このコースのE-Learningも開設している	修士課程の選択科目。コース12回，セミナー形式で展開。モジュールには，この科目を選択した場合，学生に150時間の学習時間の必要が提示されている。 ・科目の目的は，看護専門職としての国際的視点を養うことにある ・当該大学の教育特色としてPBLが導入がされ，実践力のある専門職の人材育成を目指している ・教授方法は，学生中心のモジュールを作成し，クラスは講義とセッションで構成されている。学生は講義のトピックに応じて，学生主体でセミナーが展開される ・キーとなる異文化理解は，法律，倫理，疫学などの分野で教材が「提示され，広い視点で理解できるように構成されている ・科目課題として，学生が関心を持つ国の健康プロフィール（人口分布，社会，文化，政治，経済統計，保健サービス従事者の数や職種，健康に影響を与える文化，政治その他の関連要因の概略）を作成し，その国の重要と思われる健康問題の根拠を明らかにする（30分のプレゼンテーション5,000字のレポート）	セミナーは，講義，ワークショップ，フィールド調査で構成された9週間のセミナー ・コースの目標は，研修を通し研修生の自国の活動における課題を明確（中間レポート）にし，ゴールとしてそのアクションプランを作成する 〈主な科目〉 1．公衆衛生と社会福祉管理 日本の公衆衛生管理のアウトラインから自国の保健福祉行政の課題を確認をねらいとする 2．リーダーシップ リーダーシップ開発，コミュニケーションスキル（既成プログラムに則ってグループワークを行う）演習を通し異文化体験を学ぶ 3．Policy plannig 方略としてPCM Poject Cycle Managementを学ぶ 4．Manegement of resources 財政管理，Total Quality Management, Human resource Development 5．評価 6．フィールドスタディ 沖縄離島の実地研修を通し公衆衛生及びヘルスシステムマネジメントを学ぶ 7．アクションプラン プランニング演習

研修生の背景	様々な背景を持つ看護職。受講生の中には海外（ヨーロッパ，日本など）の先進国の留学生や労働目的で英国に移動してきた途上国の看護師もいる。年齢層も幅が広い	ヘルスプロフェッショナルとして活動している修士学生	諸外国の研修生は，自国で既に保健行政や保健専門官として活動している者。また日本人の国際保健を専攻している学生は，既に国際協力活動の経験を有し，国際看護専門官になることを目指している
卒業後の進路	大学院への進学や元の職場への復帰など多様。教員が国際看護活動の場の紹介をする場合もあるが，多くの看護師は直に国際看護の活動には就いていない	国際的視点を養うことに目的としている。履修しても今は国際看護の活動に就く者はあまりいない	国際協力専門官，途上国における保健医療福専門官，行政官のリーダーとして活躍することを期待されている

学習内容として，国際保健に影響する文化，経済，政治，疫学的要因を踏まえた上での国際保健のヘルスアセスメントができる能力を養うことをゴールとしている。クラスは12回のセミナー形式で講義と討議で展開され，毎回のクラスは，国際保健に関する各トピックに応じた学生の討議が行われる。この科目のモジュールには，この科目の習得のために150時間が要求されており，このことからもクラスに出席するためには，学生に相当の学習準備が求められている。これらのクラス討議を経て，科目の課題として，学生は関心ある１つの国を選択し，その国に関するヘルスプロフィールの作成と鍵となる健康課題について根拠を明らかにしてまとめることが求められている。これらから，この科目のねらいである修士レベルの看護職の国際的視点として，具体的に国レベルのヘルスアセスメントができることを求める教育内容となっている。

Ⅳ．日本の国際保健人材育成教育
――公衆管理行政セミナー

このセミナー（**表１参照**）は1998年に実施された公衆衛生人材育成セミナーから発展し，厚生労働省，国立保健医療科学院，独立行政法人国際協力機構の協賛により行われている。セミナーの趣旨は，国際保健や保健行政に携わる国内外（ホスト国，相手国）の実践者を対象とし，将来その分野の管理またはリーダーの養成を目指すものである。日本での研修生は「国際保健」を選考する修士レベルの学生である。セミナーは研修生が日本の保健行政管理に関する講義や演習を通し，自国における適切な保健行政のあり方を導くことができることを趣旨としている。講義，ワークショップや沖縄でのフィールドワークで構成される９週間のプログラムである。研修の最終目標として，研修生の自国の課題に対するアクションプランを作成し提示することが求められ，修了後，管理的立場に立つ研修生にとっては，より実践的な内容となるように構成されている。

Ⅴ．国際保健・看護教育の課題と展望

英国での２コースは，それぞれ特色を持っていた。一つは公衆衛生熱帯医学を基盤とした看護職のためのコースで，将来開発途上国での実践に備える人材となりうる人々が学んでおり，他の一つは，修士課程の学生に対して看護職が中心となって提供する「国際保健」のコースで，他の保健関連分野の学生とともに看護学の修士レベルの院生が学ぶものであった。日本では，国内外の国際開発に関わる人材とともに学習できる恵まれた環境であるが，その中で学ぶ看護職の数は限られていた。現在，国際協力で働いている看護職が求めている各看護専門領域での国際協力でのコース内容の開発は，現在提供されているコースからさらに開発する必要性が示唆された。

今回の英国と日本の国際保健・看護領域の様々なコースで共通している教育内容として，国際保健を文化，経済，政治の側面からグローバルな視点で捉え，国・国際間レベルの健康をアセスメントできることが求められていた。また，スキル教育や実態を踏まえたヘルスプランの作成などから，実践に結びつく教育が重視さていた。

2003年までの著者らの調査結果で大きくは３点が明らかになった。第１に開発途上のホスト国での看護職の関わる仕事は看護行政，病院管理，臨床技術移転，地域保健，職能団体支援と多様であった。第２に，多様な職種であっても，そこで求められる能力は：１）ホスト国の文化・社会・経済・さらに保健行政・保健医療サービス提供システムを理解し，２）健康課題を見極め，３）カウンターパートと協働関係を作り，４）ホスト国のカウンターパート・チーム，日本側のプロジェクト・チームとの協働関係およびその他の関連援助機関とのネットワークを形成しつつ，５）課題達成のためのアセスメントをし，６）計画，７）実践，８）評価をその状況の変化に合わせてホスト国の開発のために遂行することであった。そして，第３に，そのための人材の育成にはそれらの活動を遂行できる能力を養う教育が必要であることであった。

英国の２コースは開発途上国での経験の有無にかかわらず，まず，コースで学んだ学生にグローバルな視点を提供し，さらに将来，国際開発に貢献することを動機づ

けるものであった。国際協力活動経験の豊富なロンドン大学熱帯看護コースの Claire Bertschinger 氏が述べたように，国際開発の指導的実践者としては，さらなる高等教育が必要であろう。

これまで，日本の看護教育においては国際的看護について基礎看護教育課程でのみであった。看護の基礎教育課程では国際保健・看護領域の教育で学部生への国際貢献の第一歩となる動機づけを提供してきた。今日，多くの看護職が国際開発協力を経験してきている。さらに，それらの看護職の国際貢献の質の向上を図るためにはさらに上級者向けの教育が準備される必要がある。

今回の海外・日本での国際保健・看護関連教育プログラムの調査結果を基に，これまでの調査で構築してきたカリキュラムを見直し，2005年度から聖路加看護大学は大学院修士課程において国際看護学として開講予定である。目下準備している教育目的は「自らの看護の専門性を基盤に国際保健・医療の知識・技術を持って，『国際医療協力』の看護領域のリーダーとして従事できる実践的能力を育成する」ことである。さらに，国際連合や世界保健機関をはじめ機関の施策に沿って相手国の広い理解とプロジェクト内外の調整を行い，チームのよりよい開発協力活動を展開させるプログラム企画・評価のできる能力を修得できるようなコースを提供する予定である。この国際看護学の第1期生には，パイオニアとなって，これまでの院生自身の国際協力の経験を振り返りから始め，準備したコースの中で，各自が必要な知識・技術を自ら見出し，獲得してゆく学修プロセスを期待したい。

引用文献

1）厚生統計協会．厚生の指標．東京，国民衛生の動向，51巻9号，2004，27－34.

2）森淑江．国際看護と看護教育．第26回日本医学会総会会誌〔3〕．2003，193p.

3）田代順子．平成15年度厚生労働省国際医療協力研究委託費研究報告集．国立国際医療センター，2003，209－214.

4）Kenny, G.　The origins of current nurse education policy and its implications for nurse educators. Nurse Education Today, 24, 2004, 84－90.

5）Osborn, R.　英国の看護教育制度概観．Nursing Today, 10 (13), 1995, 12－16.

6）Watson, R. & Thompson, D.R. The trojan horse of nurse education. Nurse Education Today, 24, 2004, 73－75.

7）UKCC (United Kingdom Central Council for Nursing, Midwifery and Health Visiting). (1999). Fitness for practice and purpose, from http://www.nmc-uk.org/nmc/main/search/doSearch?searchValue=fitness+for+practice〔2004-11-25〕

8）Gerrish, K.　英国およびシェフィールド大学における大学院教育，Quality Nursing. 9 (5), 2003, 394－398.

参考ホームページ

・グラスゴーカレドニアン大学看護助産地域保健学部
http://www.gcal.ac.uk/nch/index.htm
〔2004-11-25〕

・リバプール大学熱帯医学大学院看護職を対象とした熱帯医学コース
http://www.liv.ac.uk/lstm/taught/TropMedNurses.htm　〔2004-11-25〕

・ロンドン大学衛生熱帯医学大学院熱帯看護学ディプロマコース
http://www.lshtm.ac.uk/prospectus/short/
〔2004-11-25〕

・英国の看護助産協議会（NMC）
http://www.nmc-uk.org/nmc　〔2004-11-25〕